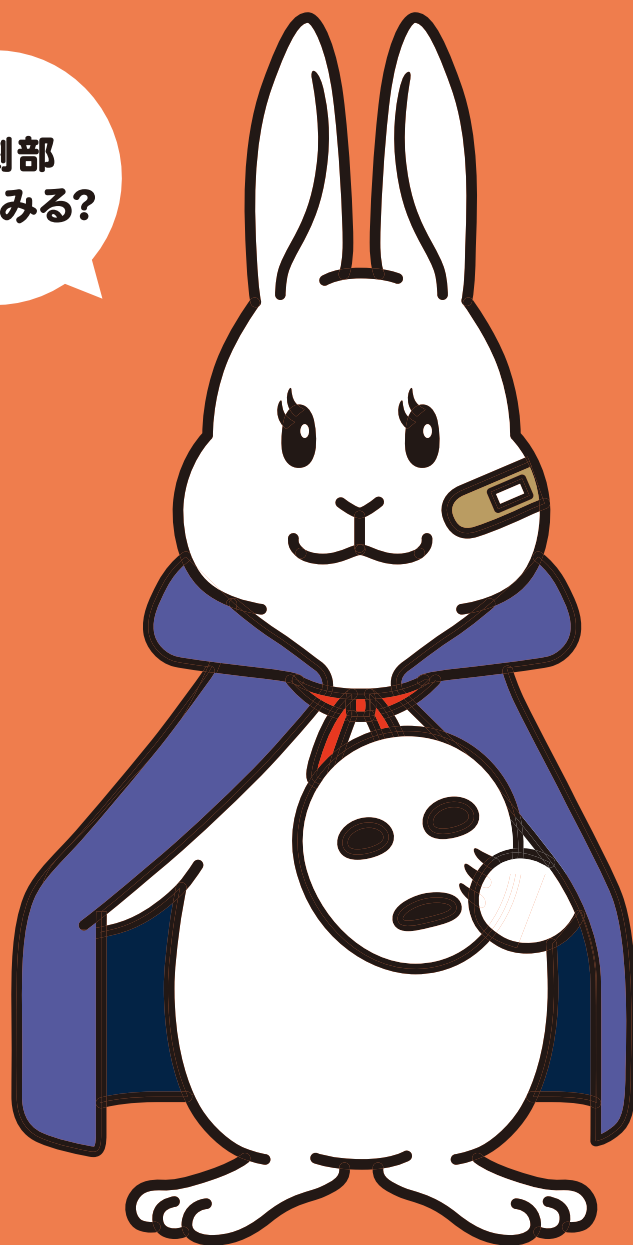


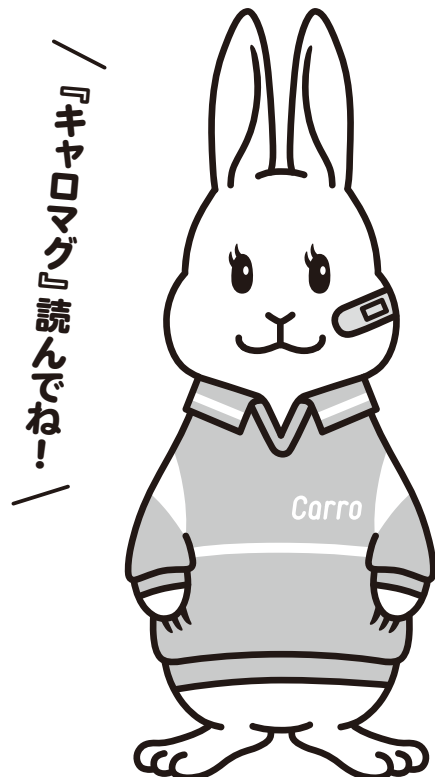
CarroMag.

演劇部
入ってみる?



ワークショップ・レポート
世田谷パブリックシアター演劇部
中学生の部

三軒茶屋のキャロットタワーにある世田谷パブリックシアターには、組織名と同じ「世田谷パブリックシアター」(600席)と「シアタートラム」(200席)という2つの劇場があり、年間を通じていろいろな演劇やダンスの作品を上演しています。ですが、その活動は劇場での上演活動に留まりません! 3つある稽古場や、セミナールーム、世田谷区内の小中学校や児童館、高齢者施設などで、小学生からお年寄りの方まで、ありとあらゆる方たちが参加できるレクチャーや演劇ワークショップを行っています。キャロマグ(CarroMag.)は、そんな世田谷パブリックシアターの、通常目に留まることの少ないこうした活動を不定期で紹介する冊子です。ご案内をつとめるのは、うさぎのキャロちゃんです。もし、ちょっとでもご興味をもって頂けるような内容がありましたら、今度はぜひ参加しにいらしてくださいね。



(Back Number)

バックナンバー



Vol.1 2013年3月号
ワークショップ・レポート
「地域の物語」2011-2012
1960年代の世田谷



Vol.2 2013年4月号
ワークショップ・レポート
高校生のための
演劇ワークショップ'12



Vol.3 2013年11月号
ワークショップ・公演レポート
ユース・パフォーマンス2013
トバズニハ『コンパス グルグル』



Vol.4 2014年2月号
レクチャーレポート 2013
舞台芸術のクリティック



Vol.5 2015年1月号
ワークショップ・レポート
世田谷のこえ アーカイブ
プロジェクト2012-14
世田谷区で暮らす——
移り住むこと、移り住むひと

CarroMag.

Vol.6 | Feb.2015

CONTENTS

ワークショップレポート

世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部

世田谷パブリックシアター 演劇部ができるまで

4

世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部 活動の記録

2013年度 6

2014年度 9

[座談会] 体験者は語る、中学生たちの座談会 13

[座談会] 中学生と演劇 16

CarroMag. Information

近日開催予定の主なイベント・ワークショップ 20

学芸スタッフから

おまけマンガ『たまにはこんな役 #5』

編集後記

演劇部、 部員募集!

世田谷パブリックシアターでは、1年を通じて中学生を対象としたワークショップを行っています。その名も『世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部』。毎回、様々なテーマややり方で演劇をつくることを試していきます。

「演劇部」と言っただけで、1年全部に通わなきゃいけないわけではありません。1年間で第一期・第二期・第三期の3期間に分けて実施をしていますので、自分の都合がつく時や、興味のあるテーマの時だけでも参加できます。それに、「演劇部」ですから、俳優養成講座ともちがいます。誰かに教わるのではなく、自分たちで感じ考えることから演劇をつくっていくのです。

演劇が大好きな人はもちろんですが、「学校に演劇部はないけれど、実は演劇やってみたい」とか、「演劇部じゃないけれど、演劇がなんか気になるなあ」とか、ちょっとだけ演劇に触れてみたい人にも来てほしい。演劇がトクベツ好きじゃない人も、「いつもとちがう何かをやってみよう」とか、「ヒマな休みに何かしたい」とか、そんな気持ちで来てください。

いろんなみんなで集まって、「中学生にしかできないエンゲキ」をつくりませんか。



世田谷 パブリックシアター 演劇部 ができるまで

世田谷区内には区立中学校が現在（2015年1月時点で）29校ありますが、そのうち演劇部があるのは10校だけ。残りの19校には演劇部がありません。自分の学校に演劇部がなかったり、あっても何らかの理由で入れない中学生たちにも、演劇をつくる課程を体験したり、演劇を通して人と知り合ったり何かを考えたりできる場を、提供したいと考えました。そこで、2012年度にまずプレ事業を実施し、次の2013年度にスタートしたのが、中学生を対象とした演劇ワークショップ『世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部』です。

演劇部支援のはじまり

『世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部』の発足は、それまで劇場として、区立中学校の演劇部を支援してきた経験が元になっています。

演劇部支援を始めるきっかけとなったのは、2008年4月。区立弦巻中学校副校長（当時）の苅込希先生から電話がありました。「演劇部をつくることにしたけれど、どうしていいものかわからない」。お話を伺うと、部員はひとりでした。

たったひとりの演劇部員、Iさんは、中学生に

なったら演劇部に入って演劇がしたいという強い希望を持っていました。弦巻中学校には演劇部があると知り、別の学区から越境入学してきたのです。しかし、いざ入学してみたら、それまで所属していた生徒は昨年度に卒業しており、なんと部員数はゼロ、休部状態にありました。それでもIさんは、演劇部で演劇がしたいという気持ちを訴え、その熱意を受けた苅込先生は、顧問を引き受けることにしました。しかし演劇部の顧問を務めた経験がない苅込先生は、どう活動をしていけばよいのか悩んでいました。そんな時、世田谷パブリックシアターが区立小中学校全校に配布している「学校向けワークショップ実施校募集」のチラシが目にとまり、とにかく相談してみようと連絡をくださったのです。

弦巻中学校演劇部の活動日は毎週月曜日でした。進行役と劇場スタッフが毎回の活動に伺い、演劇ワークショップを実施することにしました。Iさんは、毎日友人やクラスメイトに声をかけ、興味を持ってくれた生徒が週に一回の部活動に体験入部に来てくれました。秋に学校内で実施される合同発表会では、Iさんの中学校入学当日から、演劇部を立ち上げるまでを描いた、短い演劇作品を発表しました。やがて、体験入部に来てくれた人の中からひとり、またひとりと部員が増え、さらに翌年、その翌年と、次第に増えていきました。

外部指導員の派遣

同じ2008年の秋、劇場スタッフは世田谷区立中学校演劇発表会を観に行きました。この区大会は、世田谷区立中学校教育研究会演劇教育研究部（世中研）に所属する、中学校の先生方が運営しています。すべての上演が終わった後、上演各校の演劇部顧問の先生方から、個別に部活動の様子を伺いました。「いくつも部活動の顧問を兼任していて、なかなか積極的に関わることができない」「毎日の授業に加えて事務的な仕事もあり、部活動に専念できる時間がない」

「外部指導員をお願いしたいが、いい人を知らないで教えてほしい」など、顧問の先生だけで運営、指導していくのは大変だという実態を知ることとなりました。

そして、演劇部支援を希望する学校に、外部指導員として進行役を派遣する形で支援を行うことにしました。「学校向けワークショップ実施校募集」のチラシにも「演劇部支援」の実施を明記し、希望校の募集を開始しました。2009年度は4校からの依頼があり、このような派遣支援は2012年度まで継続しました。

劇場でのワークショップ実施

2010年度からは、世中研から依頼を受け、夏休み期間中に、区立中学校演劇部に所属する生徒を対象としたワークショップも実施しています。演技指導や技術習得をするワークショップではなく、集団での作品創作をする際の「工夫の仕方」を発見し、普段の部活動に持ち帰ることができるような内容にしています。それと同時に、普段の学校生活では知り合うことのない他校の演劇部の生徒との交流も生まれています。次に再会するのは秋の区大会かもしれません。都大会選出を狙って優劣を競う相手としてではなく、演劇創作に興味関心を持つ「仲間」として再会してほしいと願っています。

区大会の技術協力

また、2011年度からは、区大会の技術協力も行っています。区大会に向けてのイメージを実現できるように、また、本番を事故などなく安全に上演できるように、劇場の技術部スタッフ（舞台・照明・音響）が各校の技術担当の生徒や顧問の先生から要望を伺い、仕込み、リハーサル、本番当日の技術運営を行っています。

世田谷パブリックシアター 演劇部発足

このように、外部指導員の派遣、ワークショ

ップの実施、区大会への技術協力をする中で、区立中学校演劇部に対して支援を行ってきました。しかし、長期休み期間中に実施する『中学生のための演劇ワークショップ』に参加した中学生から、「休み期間中だけではなく、もっと時間をかけて演劇づくりをやってみたい」「演劇部をつくって欲しい」という感想や意見をもらったことで、学校に演劇部がなかったり、すでに他の部活で活動していたり、学校の演劇部に馴染めない、といった中学生には支援の手が行き届いていないことに気づきました。

世田谷区立中学校の各演劇部は、部員のみならず、顧問の先生方のご尽力と、それを支える外部指導員がうまく協力しながら運営されるようになりました。そこで世田谷パブリックシアターでは、学校教育の現場から発信される演劇とは趣向の違った作品を、演劇の専門家として発信することを試みようと考え、『世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部』を立ち上げたのです。

この活動は、1年間で3期に分け、第1期、第3期は短期完結のワークショップ、第2期は2か月をかけて演劇作品を創作する企画としました。世中研の先生方にもご理解をいただき、第2期に参加することで、区大会に有志団体として参加して20分ほどの演劇作品を上演できることになりました。先生方からは「部活動での作品づくりだけではなく、教科の学習にも活用できる可能性を感じる」「こんな演劇もあるのかと、新しいアイデアを発見できた」といった感想をいただいています。

各中学校演劇部の活動と並走しながら、新しい中学生の演劇表現を提示することによる演劇部支援の形、それが『世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部』です。演劇についての悩みや問題について気軽に相談できる存在として、また演劇作品を創造し発信していく存在として、地域社会に関わり、それを構成する一つの役割を果たしていきたいと考えています。

2013_{年度}

いよいよ始まった「世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部」！手探りだけど、大胆に、いろんなことを試してみます。第一期と第三期は、それぞれ「演劇を構成する要素」や「言葉のやりとりの自然さ・不自然さ」をテーマにした短期集中型ワークショップを、そして第二期は世田谷区立中学校演劇発表会（区大会）に向けた作品づくりをじっくり行いました。

第一期 「演劇を構成する要素」 — — — — —

『空間×身体』

進行役：富永圭一（abofa）

参加者数：15名

テーマ：「空間」と「身体」

2013年5月11日〔土〕・12日〔日〕

2人組になって、「老後にしたいこと」や「心の支えはなに？」といった質問をしあいます。互いの位置、姿勢、向きなどを変えるだけで、アラ不思議、観ている人たちの受け取る印象が変わります。

『ニュースからエンゲキ』

進行役：柏木 陽（NPO法人演劇百貨店）

参加者数：11名

テーマ：「時事問題」

2013年5月18日〔土〕・25日〔土〕

新聞記事の中から気になる事件を選んで、まずはそれを劇に。そして、前後の出来事を想像して劇をふくらませていきます。現実にあったことをベースに物語を生み出す方法を探したのです。

『文章を読む』

進行役：柏木 陽（NPO法人演劇百貨店）

参加者数：15名

テーマ：「読み方」

2013年6月29日〔土〕・30日〔日〕

「東京ドドンパ娘」や「世迷い言」など、昔の歌謡曲の歌詞を一人で読んだり、複数人で読んだり、声の大きさを変えたり……読み方を工夫することで、伝わることや感じ取れることに変化があることを発見！

『ギキョクにダイブ!』

進行役：とみやまあゆみ

参加者数：17名

テーマ：「戯曲」

2013年7月14日〔日〕・15日〔月・祝〕

いくつかの戯曲を読み、登場人物が「なぜ」そのように考え、行動しているのかを探っていきます。テキストをどう演劇的な動きにしていくか、に向き合った回でした。



第二期 「区大会に向けた作品づくり」 — — — — —

発表作品『竹取物語』

進行役：大西由紀子（NPO法人演劇百貨店）、
柏木 陽（NPO法人演劇百貨店）、
富永圭一（abofa）、とみやまあゆみ

参加者数：17名

全11日間（作品づくり8日間、本番・振返り3日間）

2013年9月8日〔日〕～11月10日〔日〕



発表作品『竹取物語』より

区大会に向けて、「竹取物語」を題材に。しかしなんと、台本（戯曲）はゼロからのスタート！ えっ？ これで演劇ができるの？ と戸惑いながらも、まずは原文を読みます。意味がわからない古語を調べ、現代の言葉に置き換えながら、竹林や海原といった風景や、風、波といった音を、道具を使わずに自分たちの身体だけで表現していきます。グループごとに場面をつくったら、それらをつなぎあわせ、さらに原文の「今は昔、竹取の翁といふものありけり」といった印象深い一節を取り入れたり……。そうして演劇作品『竹取物語』は完成しました。6日目からは作品をさらにブラッシュアップ！ 配役を変えてみたり、重要な場面を際立たせる工夫を考えたりしながら、何度も稽古をして、いざ発表の日へ！



第三期 「言葉のやりとりの自然さ・不自然さ」 — — — —

『ちょっと、そのアナタ!』 Vol.1

進行役：富永圭一 (abofa)

参加者数：16名

テーマ：自然な言葉のやりとりにある
魅力を探す

2014年1月18日 [土]・19日 [日]

2人組になって〈自然な言葉づかい〉で「食い逃げ」や「ナンパ」などのシーンをつくってみます。それを観ながら、もっともっと、普段の様子に近づくように作り直していきます。さらには、お互いにインタビューに挑戦。ただ「質問し、応える」だけのやりとりのはずが、なんだかオモシロイ……!

『ちょっと、そのアナタ!』 Vol.2

進行役：柏木 陽 (NPO法人演劇百貨店)

参加者数：12名

テーマ：不自然な言葉づかいにある
魅力を探す

2014年2月15日 [土]・16日 [日]

Vol.1でのインタビューを文字にしたものや、家電の説明書などを工夫して読みます。スピード、リズム、抑揚を変えてみたり、デパートのアナウンスや、お経のように読んでみたり……。〈不自然なこと〉を意図的に用いて、なんでもない言葉づかいを魅力的にする方法(=演劇の力!)を探りました。

2014年度

「今年度からよろしく。今年度もよろしく。」新しいメンバーもたくさんやってきて、2年目がスタート! 2014年度も第一期は「演劇を構成する要素」を、そして第三期は「おもしろい!と感ずること」をテーマにワークショップを実施し、やはり第二期は区大会に向けての作品づくりを行いました。

第一期 「演劇を構成する要素」 — — — — —

『動きと出会う』

進行役：楠原竜也

(振付家・ダンサー/APE主宰)

参加者数：8名

テーマ：「動き」

2014年5月17日 [土]・25日 [日]

2〜3人組のグループで、「リーダー」になった人の動きを真似します。跳んだり、かがんだり、寝転んだり、腕を上げたり……稽古場の中を自由に動き回りました。さらには全員で、集団で「リーダー」を替えながら動いてみます。交代のタイミングも順番も決まっています。スッと集団を抜けた人が次のリーダーに! 周りの動きに気を配る方法や、人それぞれの特徴を発見していきます。

『観ることから みつけてみよう!』

進行役：富永圭一 (abofa)

参加者数：9名

テーマ：「観ること」

2014年5月31日 [土]

世田谷パブリックシアターで上演された過去の舞台映像を観て話し合い。演技や物語だけではなく、俳優がお互いにコミュニケーションをどのようにとっているか、照明や音響はどのような効果を生んでいるか……などを意識しました。

『音をきく、音をつくる、 音をみせる』

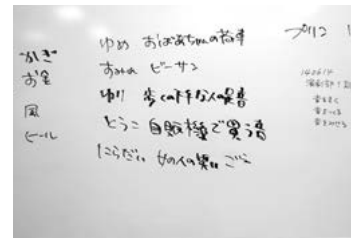
進行役：とみやまあゆみ

参加者数：8名

テーマ：「音」

2014年6月14日 [土]・15日 [日]

身の周りに起こっていることを、視点を変えて表現してみる。スーパーや広場、神社にグループ別に出かけて行って、そこで聞こえた店内放送、水や風、自転車の音、話し声や足音など、たくさんの音を稽古場に持ち帰り、「自分の身体だけでできること」を使って再現します。身体って、いろんな音を表現できるんです!



第二期 「区大会に向けた作品づくり」 - - - - -

発表作品『人類と金』

進行役：柏木 陽（NPO法人演劇百貨店）

参加者数：15名

全12日間（作品づくり9日間、本番・振り返り3日間）

2014年9月14日〔日〕～11月9日〔日〕



発表作品『人類と金』より

この年もやはり台本はナシ。しかも去年の『竹取物語』のような原作さえ用いず、テーマだけを設定して演劇作品をつくることに……。そのテーマは、ズバリ、「お金」！ お金の誕生から現代まで、人類に何が起ってきただろうか？！ 狩猟をしていた原始時代、物々交換を経て通貨が生まれた時代、新天地に富を求めた大航海時代、数々の発明を経て豊かになったのにけっきょく働きづめの現代……等々。各シーンに登場するマンモスや洞窟、飛行機、太陽の塔、コンビニなどを自分たちの身体だけを使って表現しながら、「人類の歴史」と「お金」をテーマにした多くのシーンをつくっていきます。さらには、「時間がお金で買える」SF的未来を妄想！ その未来、過去、そして現在をつなぎあわせて、たくさんの時代をめぐる物語、『人類と金』がついに完成しました！ 8日目のワークショップでは、この演劇部初の美術（小道具）となる「大きな布」を製作。みんなの記憶だけを頼りに世界地図を描きつけたこの布は、冒頭とラストシーンで、人類とその世界を表現する重要な仕掛けになりました。そして20分の持ち時間にこのスケールの大きなすべての時代を収めるため、何度も練習し、区大会の本番に挑んだのです。



第三期 「おもしろい!と感ずること」 - - - - -

みんなの「おもしろい!」をつくる。

Ver.1『場面をつくる』

進行役：金谷奈緒（青山ねりもの協会）

参加者数：14名

テーマ：中学生が「おもしろい!」と感じ
考えたことから場面をつくる。

2015年1月17日〔土〕・18日〔日〕

普段の生活の中で自分がおもしろいと感じた出来事の「何がおもしろいのか?」を、グループそれぞれの基準で分析して発表しました。その分析をもとに、「家族」「部活」「アイドルグループ」「老人会」という設定から物語をつくって発表！



みんなの「おもしろい!」をつくる。

Ver.2『登場人物をつくる』

進行役：瀬戸山美咲

（劇作家・演出家／ミナモト主宰）

参加者数：13名

テーマ：中学生が「おもしろい!」と感じ
考えたことから登場人物をつくる。

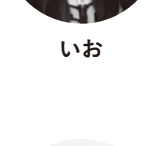
2015年2月14日〔土〕・15日〔日〕

「形容詞」と「名詞」を思いつくまま別々のカードに書いて、組み合わせてユニークな「二つ名」をつくり出します（「遊びたい+社長」、「ふつうすぎる+マドンナ」など）。そしてその「二つ名」から人物を想像し、その不思議な人たちが登場する「おもしろい」物語をつくって上演！



体験者は語る、 中学生たちの座談会

『世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部』に参加した中学生たちは、いったいどんなことを体験したのでしょうか。2013年度・2014年度の第二期を経験した中学生たちが、「ワークショップを通して感じたこと、影響を受けたこと」をテーマに座談会を行いました。

			
かなん	サトウミ	じいや	しょうきち
			
いお	すみれ	なっちゃん	はるか
			
すず	ゆめ	レイア	れいち
			
			ひなこ

活動を通して変わったこと

——『世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部』での体験、とくに第二期での作品づくりの体験を通して、何か発見や変化はあった？ちなみに1年目は原作のある『竹取物語』を、2年目は「お金」というテーマから『人類と金』という作品をつくったよね？

ひなこ | 部活やめてからあんまり楽しくないな、と思ってた時に演劇に

出会って、この演劇部で活動を始め、ここだけじゃなく普段も自分の意見を言えるようになってよかったです。

すみれ | 授業では当てられても答えられなかったりしたのが、今は結構答えられるようになった。まあ授業じゃない時は叫んだりもしてるんですけど(笑)。

ゆめ | 普段のクラスでも私はテンション高いほうなんだけど、ここではもっとテンション高くなるかな。最

初は知らない人だらけで、みんなに圧倒されるような感じだったと思うんだけど、だんだん、クラスにいるとき以上に積極的になっていった気がする。「誰かに先を越されるのがイヤだ！」って感じになってきた。

すず | 「そこは私がいただきます！」って感じ？(笑)

ゆめ | そうそう。多少は変わったんじゃないかなっ！

かなん | 学校で発表する時とか、みんなトップバッターを避けがちなん



だけど、「後からやるとハードルあがるから今やっとけ」っておっさん（注：進行役の柏木陽）にワークショップで言われて。それで学校でも最初のほうに手を挙げるのが多くなった。

なっちゃん | うちのクラスは女子が手を挙げると「なんだアイツ」みたいに思われる感じがあって、手を挙げるのがイヤだったんですけど、今は5番目くらいには手を挙げるようになったかな……。でもこないだ国語の時間に3回くらい連続で間違えてどん底に落ちたんだけど（笑）。

すず | 学校だと「普通でいなきゃいけない」という意識がある。でもワークショップに行くと、ありのままの自分でいられるのがいい。変身できるっていうか。

いお | 私は学校でもどこにいても変わらないタイプなんだけど、おっさんの影響はかなり受けてるなと思う。洗脳ってほどじゃないけど（笑）。

はるか | あ、わかるかも。変なこと考えてそうじゃん、あの人（笑）。うちは人見知りで、同学年じゃないと人の目を見て話せないんだけど、おっさんは不思議と最初会った時から目を見て話せたんですよね。

じいや | 最近おっさんくさいってクラスの女子とかに言われるんですよ。

——それは普通の意味で？（笑）でもじいやは、柏木のおっさんに意見を言うようになったよね、だんだん。**じいや** | 言ってます？

いお | 言ってる言ってる。しかも前は関係ない話だったのが、ちゃんと関係ある話になった（笑）。

——否定じゃなくて、意見を言うようになったね。……他の人はどんな変化があった？

レイア | ここのみんながすごいから、刺激されて学校の宿題をマジメにすようになった（笑）。宿題しないと学校の補講でこっちに来れなくなったりして、久しぶりにこっちに来たらとっても進んでいて、すごく大変だったから（笑）。あと、土日に予定ができたことと、学校以外で話せる人ができたことかな。

れいち | 2013年度の第二期で『竹取物語』をやって、最初は古文なんて意味分かんないと思って苦手意識があったんだけど、テストで『竹取物語』が出た時に「あれ、これ俺がやった役じゃね？」と思って（笑）。それから古文や和歌への苦手意識がなくなって、むしろ好きになりました。

すず | 体育の授業で創作ダンスをやってるんだけど、ワークショップでやったことが活かして、新しい自分が出せて嬉しい！

サトウミ | 学校の部活で都大会に出場して、そろそろ引退、もう少し続けたいなと思ってた。成績悪くてメンタルも落ちてたら、「演劇っていう選択肢もあるんじゃない？ そっちで自分の花咲かせてみたら」ってお母さんにしんみりと言われて、「ああ、お母さん……！」みたいになって（笑）。今は演劇のできる高校に行きたいです。

しょうきち | 僕は科学部なんですけど、この間の大会（注：2014年度世田谷区立中学校演劇発表会）に偶然、科学部顧問の先生が来てたんです。その時、「うちの学校でも演劇がしたいですね。」って話していたら、次の日に校長先生に相談してくれて、科学部に演劇の活動を取り入れることになった。「科学演劇部」みたいな感じ（笑）。いろんな科学の実験をしながら、演劇もやるっていう。**一同** | それ、すごーい！（笑）

演劇のイメージが変わった

かなん | 演劇っていうと台本とか衣装があるものだと思ってたけど、ワークショップをやるうちに、普段何気なく考えてることとか、よくわからない絵とか、本とか……いろんな角度から演劇をつくる切り口がいっぱいあるんだってわかりました。ど

うやってここからつくっていくか、考える瞬間が楽しい。

ひなこ | こんなやりかたもあるんだと思った。それにみんな意見いろいろ言うし、自分の意見が通った時に「よっしゃ使われた！」って気持ちにもなる（笑）。

すず | ひとりひとりの違う意見を聞くのが面白くて。いろんなアイデアが出てくる瞬間が面白んだよ。

レイア | 最初はお母さんに「今日は何したの？」って訊かれて「演劇っぽくないことしてた」って答えるくらい、「へー、ぜんぜんこれ演劇とちがくない？」って感覚だったんだけど、そこが面白かった。

はるか | 第二期の2回目くらいからやっと、このあと何かありそうだし、演劇と関係あるのかもって思ったよね（笑）。

サトウミ | 日常とちょっとだけ離れた感じの空間があると思う。普通のドラマだと、日常と同じように、飛行機に乗る時は飛行機を使うじゃないですか。でもここでは自分たちが飛行機になって飛んでく、みたいにイメージや妄想を使うことになる。最初は「ん？」って違和感あったけど、だんだん面白いと思えるようになって、考え方も変わったんですよね。

いお | 私は2年続けて参加したんで

すけど、一緒にやるメンバーが違っていると想像以上に違う体験で、驚きました。それに1年目は原作もあったけど2年目はそれすらもないし。「え、これやるの？ こんなぐちゃぐちゃでいいの？」ってすごい戸惑った。しかもそれで区大会も出るとか信じられない……。でも他の学校の人からも面白かったって言ってもらえたと、印象的だったばって。

しょうきち | やっぱりね、パプシアの演劇は想像していたのと違うから、最初は「これ演劇なのか？」って拍子抜けしたけど。ただのウォーミングアップかな、と思ってたら、それをくっつけて演劇にするという……。その発想はなかった。でもまわりからウケてるし、こういう演劇もあるんだなあと。普通の演劇とはやっていて違う面白さがあると思う。

——世田谷パブリックシアターを「パプシア」って略すのがちょっと斬新ですね（笑）。でも、拍子抜けしたと思いつつも、また来てくれたわけだね。

しょうきち | そうなんです。物事を始めた以上は途中でやめるのは悪い気がして、っていう気持ちもあったんだけど、でも家に帰って他のことで遊ぶと、またパプシアもやりたくなって気になるんですよね。恋しくなる。

なっちゃん | 私も「何なのこれ？」って思いながらだんだん楽しくなってきたけど、やっぱり田舎が恋しいみたいない感じでしょ？

しょうきち | 東京に憧れて上京してきたけど、やっぱり田舎が恋しいみたいない感じでしょ？

なっちゃん | それぞれそれ！

——それ、「ふるさと」っぽいか、そういうこと？（笑）では最後に、これから入ろうかなって思ってる人に向けてひとことお願いします。

すず | 台本はないと思ってください（笑）。

ひなこ | 演劇が好きな人はおいでください。

しょうきち | 演劇のスタート地点。来たら仮面をお脱ぎください。

なっちゃん | 恥を捨てろ。オープンでいけ！

かなん | 来なきゃ損！

じいや | 引っ込み思案のあなたからオープンなあなたまで、どんな人も来られます、世田谷パブリックシアター演劇部！

いお | 「演劇部ってつままないんでしょ？」とか思ってる人も絶対好きになるはず。やめられないとまらない、演劇ワークショップ！

座談会 中学生と演劇

世田谷パブリックシアター演劇部には、どんな可能性があるのでしょうか。

劇場と学校、そして双方での実践者という3つの立場から、
「中学生と演劇」をテーマに座談会を行いました。

楫屋一之 [(公財)せたがや文化財団 世田谷パブリックシアター 劇場部長]

西郷孝彦 [世田谷区立桜丘中学校 校長/世田谷区立中学校教育研究会 演劇教育研究部長]

柏木 陽 [ワークショップファシリテーター/NPO法人演劇百貨店 店長]

劇場に演劇部?!

——まず、「世田谷パブリックシアター演劇部」ができた経緯をお話いただけますか。

楫屋 | 最初は劇場主催で中学生向けのワークショップをやっていました。何回かやっているうちに、毎回来る子どもたちが「学校で演劇をやりたいけど演劇部がない。部活をつくる手助けをしてほしい」と言う。こういった経緯から、まずは学校の演劇部支援をするようになりました。そして、どうしても学校で演劇部がつかれない子どもたちもいるから、世田谷パブリックシアターで演劇部を立ち上げてみてはどうかと。

柏木 | 劇場のワークショップで進行役をしていた我々も、劇場だけではなくって中学校に行くことで、演劇に興味はあるけど劇場には来ない子どもと出会えるだろうとも思ったんです。それが8年くらい前ですね。

演劇部支援の訪問先を募集したら、演劇部のある5校くらいが最初に手を挙げてくださいました。今、世田谷区にある29校の中学校のうち、演劇部があるのは10校です。

ただ、何年か続けていくうちに、

学校の演劇部とは関われない子たちがいたりすることも見えてきたんです。だったら中学校の演劇部支援は外部指導員という形で続けつつ、クラブチームみたいに、世田谷パブリックシアターの演劇部をつくったらどうかというアイデアを劇場から相談されました。

——劇場に別の受け皿をつくってしまふことで、学校の演劇部とバッティングするということはないんでしょうか？

柏木 | それぞれの「層」が人材的に交わらない感じだったから、両方あればいいと思いました。

西郷 | この10年間は高齢化もあって、部活を持ちたがらない教員が増えたんです。それで保護者のみなさんが何とかしてほしいと言って、区教育委員会が外部から人を雇えるようにして、外部指導員制度が始まったんですね。

一部の学校には外部から人が来るのを好ましく思わない風土もありましたから、外部指導員の方も、最初は顧問の先生と対立したり、子どもとトラブルがあったりと、苦労したと思うんです。でも最近は落ち着いてきて、本来の指導ができています。

思います。

「文武両道」とは？

楫屋 | 世田谷区教育水準は高いけれど、私立校に進学する生徒も多くいます。だから公立校には、部活を通して魅力的な学校にしていこうという考え方もあります。そうすると、スポーツ系は結果や順位が出るから、看板になりやすい。文化系でも、吹奏楽部はまだ準スポーツ系部活として捉えやすいから、学校の魅力をアピールできるものとしてクローズアップされがちだと思うんですが、同じように発表の場がある演劇部は、準スポーツ系部活として捉えられてはいない。

柏木 | 野球部やサッカー部は子どもがいなくなっても「どうやって存続するか？」って話になるのに、演劇部はすぐなくなっちゃうんですよ。この子、演劇部なくなったらきっと学校に来ないよ、って子もいるのに。

楫屋 | 野球とかサッカーは、1%くらいの可能性とはいえプロの選手になるかもしれない。これは一種の拝金主義とも言えますよね。演劇にも一種の拝金主義のような役割が当然



2013年ワークショップ風景

存在しているけど、中学校の演劇部に入ってもまずお金には繋がらないから、資本主義の文脈の中では「お金にならない=悪」として見なされてしまうわけですね。

西郷 | 校風によく「文武両道」ってあるんですけど、「文=学校の勉強」「武=体育会系」であって、芸術はそこに入らないんです。

楫屋 | 確かにそうです。演劇とか文学とかは余計なものにされてしまう。

西郷 | しかし、「無」から新しいものをつくる力を子どもに付けさせるためには芸術がないとダメなんです。学校の中のものさしは、数学とかスポーツができるとか。でもそれ以外の価値を持つてる子もたくさんいるんですよ。うちの学校では、子どもたちがやりたいって言ったことは、全部やらせるんです。グリークラブ、アニメ研究会、百人一首など……顧問がいないので公式な部活にはできないけど、勝手にやるのはOK。いろんな子がいろんなクラブをつくっています。演劇部も、学校の中のも

のさし以外の価値観を持つ子たちの居場所としてすごく大切なんですね。**楫屋** | 中学生って、いちばん難しい時期ですよ。男女でも個人でもバラつきがある。身体の変化も著しいし。サポートする側も難しいけど、だからこそやりがいがあるわけです。

柏木 | まあ、そうですね(笑)。

楫屋 | 中学生の仲間内だけでできることはまだ少ないから、的確なサポートができる指導員をつけることには意義があると思う。私個人の経験だけど、小学校の時の先生が演劇経験のある人で、一年中クラス劇をやってたんです。それこそ学校の中のものさしとは違う価値観で、キャストینگが足りなかったら年長の6年生を呼んで来るとか(笑)。それで演劇に染まっちゃったんです。そういう先生がいたから、根源的なのが見つけれられた気がしますね。

学校演劇の可能性

楫屋 | 一般的な学校演劇の特徴で今

ひとつ面白味を感じないのは、「等身大の自分たち」を描こうとして、友達とか親とか先生との関係を再現してみせるということが、わりと主流になってしまっていることです。あるいは、ものすごく破天荒な物語をつくるか。その二極なんですよ。もっと自由度のある演劇が出て来たいと思います。等身大の問題を扱うのもいいんだけど、近すぎちゃって自分たちを狭めている。そこにどう創造性を加えていけるかが演劇の面白いところですよ。そうしないとやっててだんだん面白くなってしまふ。

劇場の演劇部はいわゆる学校演劇から若干逸脱している部分があると思っています。手榴弾のピンを抜いたなっていう感じはあります(笑)。でも決して学校演劇の本体を揺るがすようなテロ的行為ではなくて、「こういう表現の演劇もありますね」と示すだけのことなんですよ。

演劇もダンスも、観る側、演じる側、評価する側が変わっていかないと



梶屋一之

と、ガラパゴスになってしまう。単に「火の鳥」の形をしたダンスをつくって、それを造形的に美しいという評価をするだけでは、子どもたちの身体性や感覚を画一化して束縛してしまう。そこからはみ出すような表現が出てこない、子どもたちの感覚についていけないんじゃないか。

柏木 | 確かに、今の子どもたちは今の大人が経験してきた時代とは全然違う現代を生きているのに、指導する側にアクチュアリティ（＝現在への感覚）がないと、子どもたちのほうが見放していくことになるかもしれないですね。

僕も演劇は高校演劇から始めたんですけど、その頃に地区大会で上演してた戯曲の作家は、唐十郎、竹内統一郎、如月小春、真船豊、野田秀樹、久保田万太郎……今の感覚でいうと異常でしょ？（笑）そこに生徒創作や顧問創作も並んであるという状態だった。今はそういうバラエティが全然ない。岡田利規を上演する学校とかないでしょ？ 柴幸男は戯曲公開【*】もあって上演している学校もあるけれども。そういう、ダンスや音楽と融合していこうとする新しい演劇の流れから、中学校や高校の演劇はぼつんと切り離されてる

感じがある。無理に繋げる必要はないけど、もう少し違う回路で進めていけば、新たな層が演劇部に入ってくるかも。

梶屋 | 完全にテレビの影響です。テレビドラマのように役があって台詞があって、女優さんがいて、お芝居をするのが演劇だというイメージを刷り込まれてしまっている。

世田谷美術館で如月小春が小学生のワークショップをやった時に、「これから演劇をつくります」って言ったら、一番前にいた小学1年生が「えんげきってなーに」って言うんですね。しかしこれが中学生くらいになると「役があって、カッコいい男と女が恋愛ドラマをする」のが演劇だと思ってるから、そのイメージを引き剥がすことをまずしないといけない。

柏木 | 世田谷美術館といえば、僕が担当した「誰もいない美術館で」というワークショップでアラブ音楽を扱った時、学芸大附属高のジャズ研の子たちが来たんです。それまで彼らはミッキーマウスマーチとか演奏してたらしいんですけど、その時にアラブ音階で即興しろとかいきなり言われてやって。すると、帰った後でその子たち、いっさい楽譜を見なくなって、延々と即興音楽をやり始めたんですって（笑）。だから何らかのキッカケがあった時に、何か違うことが始まっちゃう人たちっていうのがきつというんじゃないかなと思うんです。

西郷 | そういうのを、学校という空間でやるのはなかなか難しいですね。学校には、決まりきった問題に決まりきった答えを出せるようになることを目的にした部分も多くありますから。でも、そういったことを第一の目的にしてしまったら、新しいものってなかなか生まれないでしょう。だって「決まっていること」なんだから、「失敗」なんて許されない、あり得ないものになってしま

うんですから。失敗しないってことは、つまり新しいことをやってないということですよ。それに対して自由な雰囲気をつくっていくのが私たちの仕事だと思います。

梶屋 | 義務教育の現場は今キツイでしょうね。モンスターペアレンツが待ち構えてるから、失敗できないような「安全地帯」になってしまった。

西郷 | 表現したい子はたくさんいるし、ちょっと変わった子が演劇部に来るのもわかるんです。演劇の中では「していいこと」がたくさんあるから。

柏木 | 文化系の美術や音楽、演劇やダンスが「余計なもの」にされるのだとしたら、そんな「余計なもの」がない世の中はすごく苦しくなると思いますね。

梶屋 | 高度経済成長期以降、学芸会も、主役が複数で、場面ごとに白雪姫が変わるような状態。でこぼこをつくらないで、均一にして安全性を担保してしまうんですね。「みんな同じ」ということで隠蔽してしまうと、ひずみが出る。違う感覚を認め合うことができなくなってしまう。

ただ、前進はしていると思います。例として、劇場の演劇部に限って言えば、あとはどう先生方が評価してくださって、良いと思われる部分を



柏木 陽



西郷孝彦

自分たちの活動に取り込んでくださるか。

柏木 | あんなのも面白いかもなって思ってくれたら嬉しいですね。

学校とは別の空間

——劇場の演劇部は、中学生にとって居ていい場所の選択肢が増えることにもなりますよね。

西郷 | 学校の外の価値観で、先生じゃないオトナと話すのはとっても大事なことだと思います。

柏木 | まだオトナとしての行動範囲を認めてもらえない部分もあるし、お小遣いが少ないことも、学校以外の場所に行く時に二の足を踏む大きな要因だったりするんですよね。そう考えると、こちらから学校に行かなきゃダメかなって思うこともあります。

梶屋 | 今の子どもたちは兄弟も少ないし、人間の成長のバラエティを実感することも難しくなっている。ほぼ自分と同じ身体感覚の人しか知らない。年老いた身体性も身近で見ないでしょう。これは生物としてはものすごく欠落した異常な感覚です。それに日本は人種のるつぼでもないし、多民族でもない。そういう中で

身体感覚を実感できる場として、演劇やダンスはかなり有効だと思えますよ。

劇場の演劇部は自分の通っている学校じゃない、他の学校の子ともたちとも渡り合うことになるわけだから、その異国性がのびのびとした身体性にあらわれていると思うんですね。

西郷 | なるほど、「異国性」というのは面白いですね。学校だと成績だとか家庭状況とかいろんなことを引きずってしまうけど、外部の場だと、集まって来た子たちはバックグラウンドもお互いにわからないし、もっと個が出るのかもしれない。それはまったく雰囲気が違うと思います。**柏木** | 確かに全員が異邦人な感じですよね。近所じゃない子には「どこに住んでるの？」ってあえて聞かないとわからない関係。距離感が膨らむところがありますね。

西郷 | 帰国子女の多い学校の雰囲気 に似てるのかもしれないね。

柏木 | 中学生って、複数の価値観を身につけていく最初の時期だと思うんです。小学校だとあきらかに足早いやつが王様でしょ（笑）。でも中学校くらいになるとようやく違う別の価値基準が見えてくる。

梶屋 | 自分がまったく持っていないバックグラウンドとの遭遇ってスリリングですよね。異人と出会うような経験。違う学校、違う区域から来てるのは中学生レベルだとかなりスリリングで、初恋体験みたいな（笑）ある種のミステリアスなドキメキは、同じ学校の中よりはあると思うんですね。そういう側面でも、面白い事例だと思ってます。

さらなる可能性

西郷 | 演劇は教育のスキルとしても使えるんですよね。だって授業中の教師なんて、ひとりで1時間ひとり芝居やってるようなもんですよ。授

業の前には楽屋で気合い入れてテンション上げていく、みたいな（笑）。だから理科の授業で寸劇をつくって、個体と気体と液体の分子を演じてみよう、とかやってもいいし。生徒が気体になると教室を飛び出て行っちゃうとか（笑）。

昔は先生たちだけの劇とかもやってたんだけどね。今では考えられないけど気の弱い先生が酒飲んで勢いつけて出るみたいな（笑）。

柏木 | エキシビションで、区大会に先生劇団も出ればいいんじゃないかと。

——舞台に登場しただけで盛大に盛り上がりそうだから、その意味で、絶対「失敗」するのが目に見えていいですね（笑）。

梶屋 | 冗談じゃなく、いいと思うね。**西郷** | 演劇は、鎧をはぎ落としてくれますからね。

——最後にひとことお願いします。

西郷 | 劇場の方々には、遠慮しないで学校に出向いてどどんやってほしいなって思います。学校の活動で演劇の持っている力を活用しているのは1%くらいです。すぐ忘れられて優先順位が下がっちゃうけど、続けていけば「あ、去年もやりました」ってことになるかも（笑）。

——そういう先行事例を知ることのできるアーカイブはあるんでしょうか。ウェブサイトとか。

西郷 | あんまりないですね。

柏木 | 情報共有したほうがいい、という話にはまだなってないですね。

西郷 | 公立の学校同士が連携を始めたなら、それこそ脅威的な力になるはずなんですけど、でも今はまだバラバラだから……。それでも世田谷区の学校はいろいろ連携してやろうとしますけどね。

柏木 | 僕らみたいにいろんな学校に出入りする人間がいるだけで、多少なりともその情報共有が進むのだとしたら嬉しいんですけど。……って、富山の薬売りみたいです（笑）。

*2014年2月現在、劇団ままごとのウェブサイトで試験的に「戯曲公開プロジェクト」が行われている。



近日開催予定の主なイベント・ワークショップ

開館18周年記念プログラム
〜開館18周年記念プログラム〜

デイ・イン・ザ・シアター 〜開館18周年記念プログラム〜

日程…2015年4月5日(日) 19時〜21時30分(小パーティー付き) 対象…どなたでも
参加費…500円(要事前申込) 会場…世田谷パブリックシアター稽古場
開館以来、不定期ながら継続して実施しているワークショップです。
開館18周年のこの日に、演劇を楽しんでみませんか。どなたでも大歓迎です!

「世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部」

来年度もやるよ!

待ってるよ〜



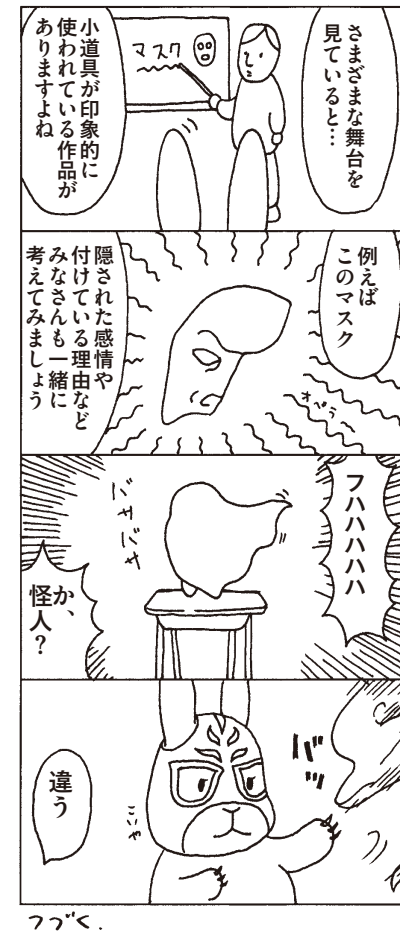
2015年度「世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部」の第一期は、5月から実施予定! 区立中学校各校や、世田谷区の図書館、児童館など公共施設の一部にも募集チラシをお送りします。詳細をいち早く知りたい人は、4月中旬頃から世田谷パブリックシアター ホームページ(<http://setagaya-pt.jp/>)をチェック!
ご質問・お問合せは、「世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部」係
(03-5432-1526)までお気軽にご連絡ください

学芸スタッフから

★これからしばらくは砂漠に行くぞと誓いをたててから適わぬこと早4年。とうとう実現化しそうな感じになりました。知らない所に少し緊張感を持って行くというのは、なんだか新しいことを始める春に相応しい行動かなあと感じてます。2014年度が無事終わりますように。[えっしー]

★私の自転車、メンテナンスを怠っていたので変速機の位置がちょっとずれていたもので、久しぶりに自分で調整しました。時間はかかったものの、ギアチェンジがカチャ! スパツ! とスムーズになりました。長い間気になっていたことが一つ解消できた証を、ギアチェンジするたびに小さな幸せとして味わっています。[たば]

たまにはこんな役 #6



[キャロマガ]
Vol.6 / Feb.2015

発行日
2015年2月28日

発行
公益財団法人せたがや文化財団
世田谷パブリックシアター
〒154-0004
東京都世田谷区太子堂4-1-1
Tel. 03-5432-1526
<http://setagaya-pt.jp>

編集
藤原ちから、落雅季子(BricolaQ編集部)
大谷薫子(本のモ・クシュラ株式会社)

企画
恵志美奈子、九谷倫恵子、
田幡裕亮、福西千砂都、荏澤大地
(以上世田谷パブリックシアター学芸)

写真
鈴木真貴、世田谷パブリックシアター学芸

『世田谷パブリックシアター演劇部
中学生の部』ロゴデザイン
アベキヒロカズ(ABEKINO DESIGN)

デザイン
ウチカワデザイン

印刷・製本
株式会社リヒトプランニング

協賛
『TORAY』 東レ株式会社

後援
世田谷区

世田谷パブリックシアターとは

世田谷区がつくり、(公財) せたがや文化財団が運営している、演劇やダンスのための専門劇場です。三軒茶屋のキャロットタワーの中に、世田谷パブリックシアター (約600席)、シアタートラム (約200席) の2つの劇場と稽古場、作業場などを擁し、ワークショップやレクチャーなどの参加体験型事業にも力を入れています。



世田谷パブリックシアター (主劇場)



シアタートラム (小劇場)

世田谷パブリックシアターへのアクセス



お問い合わせ 世田谷パブリックシアター

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー 5階
 Tel.03-5432-1526 (代表) Fax.03-5432-1559
<http://setagaya-pt.jp>

世田谷パブリックシアターは、東京都世田谷区太子堂の三軒茶屋駅にある26階建ての高層ビル、キャロットタワーのなかにあります。東急田園都市線、東急世田谷線三軒茶屋駅と直結しています。